

愛知学院大学モーニング・セミナー

夏目漱石文学

時代を超えて人を惹きつける魅力とは何か？

南山大学名誉教授
細谷 博

2024.12.10

岩波文庫

緑二九

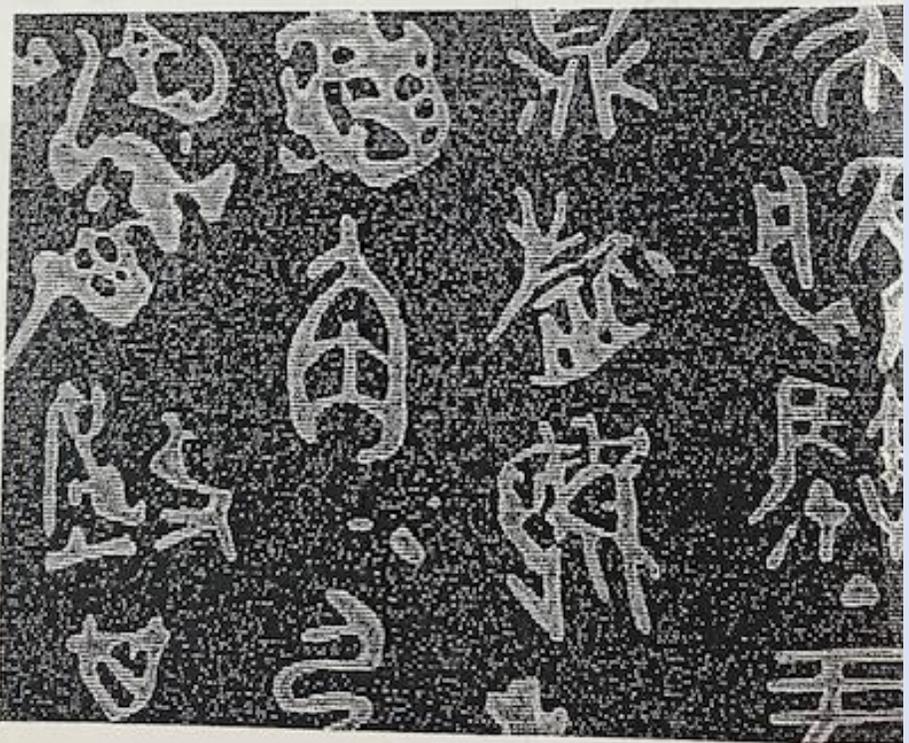
夏目漱石作



1867
-1916

夢十夜

他二篇



目次

夢十夜……………五

文鳥……………三

永日小品……………七

- 元日(六九) 蛇(七三) 泥棒(七六) 柿(八三) 火鉢(八六) 下宿(九〇)
- 過去の匂い(九五) 猫の墓(九九) 暖かい夢(一〇三) 印象(一〇七)
- 人間(一一〇) 山鳥(一一四) モナリサ(一二九) 火事(一三三) 霧(一三五)
- 懸物(一二九) 紀元節(一三三) 儲口(一三三) 行列(一三六) 昔(一三八)
- 声(一四二) 金(一四四) 心(一四八) 変化(一五二) クレイグ先生(一五五)

注解……………古川久(編)……一五

解説……………阿部昭……一八

挿画 橋口五葉

夢十夜

1908 明4/7 朝日新聞

第一夜



こんな夢を見た。
腕組をして枕元に坐っていると、仰向に
寝た女が、静かな声でもう死にますという。
女は長い髪を枕に敷いて、輪廓の柔らかな
瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬
の底に温かい血の色が程よく差して、唇の
色は無論赤い。到底死にそうには見えない。
しかし女は静かな声で、もう死にますと判
然いった。自分も確にこれは死ぬなと思っ
た。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、
と上から覗き込むようにして聞いて見た。
死にますとも、いいながら、女ははっち

りと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。

自分は透き徹るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじゃないかならうね、大丈夫だらうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに睜のまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわといった。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかといって、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離れた。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこういった。
「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢いに来ますから」

自分は、何時逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうし

てまた沈むでしよう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待っていていただけますか」

自分は黙って首肯した。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていて下さい」と思い切った声でいった。

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」

自分はただ待っていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の眼がぼちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑かな縁の鋭い貝であった。土をすくう度に、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂もした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそっと掛けた。掛ける毎に真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾って来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちていた間に、角が取れて滑かになったらろうと思った。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなった。

自分は苔の上に坐った。これから百年の間こうして待っているんだと考えながら、腕組をして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女のいった通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女のいった通り、やがて西へ落ちた。赤いまままでのち落ちて行った。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた唐紅の天道がのそりと上って来た。そうして黙って沈んでしまった。二つとまた勘定した。

自分はこういう風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行った。それでも百年がまだ来ない。しまいには、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなかるうかと思ひ出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなって丁度自分の胸のあたりまで来て留まった。と思うと、すらりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けていた細長い一輪の薔が、ふっくらと瓣を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った。そこへ遙の上から、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花瓣に接吻した。自分が百合から顔を離す拍

子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。

「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気が付いた。

●明40/6~10『虞美人草』 ●明41/1~4『坑夫』 ●明41/9~12『三四郎』
○明41/6「文鳥」 ○明41/7~8「夢十夜」

◎明42/1~3「永日小品」25話 一明43/5 初版『漱石近世四篇』春陽堂刊

○明42/1/1 東京朝日・大阪朝日
1「元日」 フロックの若い男（森田草平）、紋付きの高濱虚子

○明42/1/14~3/12「永日小品」として東朝・大朝に連載

- 2「蛇」 蛇を捕えると「覚えているよ」
- 3「泥棒」 その夜の様子、次の夜も
- 4「柿」 喜いちゃん「喧嘩をしててよ」、与吉「なんでえ、なんでえ」
- 5「火鉢」 「仕方なしに凝としていた」
- 6「下宿」 <英国もの1>（二度目の下宿Mildeミルデ家の謎）
- 7「過去の匂い」 <英国もの2>「下宿」の後日談。見上げるアグニス「暗い地獄」
- 8「猫の墓」 「動くとお寒いので、我慢して、じっと辛抱しているように見えた」
- 9「暖かい夢」 <英国もの3>到着直後、劇場へ「暖かい希臘」夢見る
- 10「印象」 <英国もの4>「暖かい夢」の続き。人の海、孤独
- 11「人間」 「こう見えたって……人間だい」
- 12「山鳥」 山鳥を提げて来る青年、貧窮
- 13「モナリサ」 女の絵、口元の笑い、呪い
- 14「火事」 火事場、翌日焼け跡見当たらず
- 15「霧」 <英国もの5>霧の街倫敦一美
- 16「悪物」 老人、悪物売って妻の墓
- 17「紀元節」 （大朝のみ）先生の書いた紀元節直した「下等な心持」
- 18「儲口」 人の儲け話と大損の話
- 19「行列」 （大朝のみ）娘達が着飾って行列
- 20「昔」 <英国もの6>（大朝のみ）スコットランド、ピトロクリの谷
- 21「声」 （大朝のみ）豊三郎が下宿、亡き母の声一貧しい婆さん「豊、豊」
- 22「金」 （大朝のみ）空谷子の、金を五色に分ける話
- 23「心」 （大朝のみ）小鳥。女、たった一つ自分のために作り上げられた顔
→●「文鳥」「夢十夜」の「第一夜」
- 24「変化」 （大朝のみ）中村是公との下宿時代
- 25「クレイグ先生」 <英国もの7>（大朝のみ）「無常」

●明42/6~10『それから』

★明43/8/4 修善寺の大患

●明43/3~6『門』

○明43/10/29~44/2/20「思ひ出す事など」32回断続

永日小品

1909 明42/153 東朝・大朝

82

柿

喜いちゃんという子がいる。滑らかな皮膚と、鮮かな眸を持っていて、頬の色は発育の好い世間の子供のように冴々していない。ちょっと見ると一面に黄色い心持ちがする。御母さんが余り可愛がり過ぎて表へ遊びに出さない所為だと、出入りの女髪結が評した事

がある。御母さんは束髪たづなげの流行る今の世に、昔風の鬘まげを四日目々々よつめづめづめにきつと結う女で、自分の子を喜いちゃん喜いちゃんと、何時いつでも、ちゃん付つけにして呼んでいる。このお母さんの上に、また切下きりくだの御祖母おばあさんがいて、その御祖母さんがまた喜いちゃん喜いちゃんと呼んでいる。喜いちゃん御琴おんことの御稽古おんげいこに行く時間ですよ。喜いちゃん無暗むやみに表へ出て、其処そこいらの子供と遊んでは不可いませんなどといっている。

喜いちゃんは、これがために減多へんたに表へ出て遊んだ事がない。尤も近所はあまり上等でない。前に塩煎餅屋しほせんべいやがある。その隣に瓦師かわらじがある。少し先へ行くと下駄げだの齒入はくいれと、鋳かけ鏡前直しがあある。ところが喜いちゃんの家は銀行の御役人おんやくにんである。塀へいのなかに松が植えてある。冬になると植木屋が来て狭い庭に枯松葉かまつばを一面に敷しいて行く。

喜いちゃんは仕方がないから、学校から帰って、退屈になると、裏へ出て遊んでいる。裏は御母さんや、御祖母さんが張物はりものをする所である。よし洗濯をする所である。暮になると、向鉢巻むかひはちまきの男が臼うすを担いで来て、餅もちを搗く所である。それから漬菜つけなに塩を振たって樽たるへ詰込む所である。

喜いちゃんは此処へ出て、御母さんや御祖母さんや、よしを相手にして遊んでいる。時には相手のいないのに、たった一人で出てくる事がある。その時は浅い生垣いけがきの間から、よ

く裏の長屋を覗き込む。

長屋は五、六軒ある。生垣の下が三、四尺崖しやくがけになっていいるのだから、喜いちゃんが覗き込むと、丁度上から都合よく見下すように出来ている。喜いちゃんは子供心に、こうして裏の長屋を見下すのが愉快なのである、造兵へ出る辰さんが肌を抜いで酒を呑んでいると、御酒を呑んでよと御母さんに話す。大工の源坊が手斧を磨いでいると、何か磨いでよと御祖母さんに知らせる。その外喧嘩はげけんかをしてよ、焼芋を食べてよなどと、見下した通りを報告する。すると、よしが大きな声を出して笑う。御母さんも、御祖母さんも面白そうに笑う。喜いちゃんは、こうして笑ってもらうのが一番得意なのである。

喜いちゃんが裏を覗いていると、時々源坊の体の与吉と顔を合す事がある。そうして、三度に一度位は話をする。けれども喜いちゃんと与吉だから、話の合う訳がない。何時でも喧嘩になってしまふ。与吉が何んだ蒼ん膨れと下からいうと、喜いちゃんは上から、やあい鼻垂らし小僧、貧乏人、と軽侮きやうぶように丸い顎をしゃくって見せる。一遍は与吉が怒って下から物干竿ものせしざなを突き出したので、喜いちゃんは驚いて家へ逃げ込んでしまった。その次には、喜いちゃんが、毛糸で奇麗きれいに膝かまった護謨毯ごもきんを崖下へ落したのを、与吉が拾ってなかなか渡さなかつた。御返しよ、放はなつて御くれよ、よう、と精一杯に焦あつ付いたが与吉は毯を

持ったまま、上を見て威張つたつて突立つたっている。詫わまれ、詫わまったら返してやるという。喜いちゃんは、誰が詫まるものか、泥棒といったまま、裁縫しよとをしている御母さんの傍へ来て泣き出した。御母さんは向むかひになって、表向おもむきよしを取りに遣ると、与吉の御袋おやくがどうも御気の毒なごさまといったぎりで毳けはとうとう喜いちゃんの手てに帰かえらなかつた。

それから三日経たつて、喜いちゃんは大きな赤い柿かきを一つ持もつて、また裏へ出た。すると与吉が例の通り崖下へ寄よつて来た。喜いちゃんは生垣の間から赤い柿を出して、これ上げようかといった。与吉は下から柿を睨にらめながら、なんでえ、なんでえ、そんなもの要らねえやと癩じつと動かうごかずにいる。要らないの、要らなきや、御廃ごやしなさいと、喜いちゃんは、垣根から手を引ひつ込こめた。すると与吉は、やっぱりなんでえ、なんでえ、そんなもの要らねえらなとおと崖の下へ寄よつて来た。じゃ欲しいのと喜いちゃんはまた柿を出した。欲しいもんけえ、そんなものと与吉は大きな眼をして、見上げていいる。

こんな問答を四、五遍繰返したあとで、喜いちゃんは、じゃ上げようといいいながら、手に持もつた柿をばたりと崖の下に落した。与吉は周章あわてて、泥つの着ついた柿を拾ひろつた。そうして、拾ひろうや否や、がぶりと横よこに食く付けた。

その時与吉の鼻の穴が震えるように動いた。厚い唇が右の方に歪ゆがんだ。そうして、食く

かいた柿の一片をべつと吐いた。そうして懸命の憎悪を眸の裏に萃めて、洗いや、こんなものと言いなから、手に持った柿を、喜いちやんに放り付けた。柿は喜いちやんの頭を通り越して裏の物置に当たった。喜いちやんは、やあい食辛抱といいなから、走け出して家へ遣入った。しばらくすると喜いちやんの家で大きな笑聲が聞えた。

火鉢

眼が覚めたら、昨夜抱いて寝た懐炉が腹の上で冷たくなっていった。硝子戸越しに、廂の外を眺めると、重い空が幅三尺ほど鉛のように見えた。胃の痛みは大分除れたらしい。思い切って、床の上に起き上がると、予想よりも寒い。窓の下には昨日の雪がそのままである。風呂場は氷でかちかち光っている。水道は凍り着いて、栓が利かない。漸くの事で温水摩擦を済まして、茶の間で紅茶を茶碗に移していると、二つになる男の子が例の通り泣き出した。この子は一昨日も一日泣いていた。昨日も泣き続けに泣いた。妻にどうかしたのかと聞くと、どうもしたのじゃない、寒いからだという。仕方がない。なるほど泣き方がぐずぐずで痛くも苦しくもないようである。けれども泣く位だから、どこか不安な所がある

のだろう。聞いていると、しまいにはこっちが不安になって来る。時によると小悪らしくなる。大きな声で叱り付けたい事もあるが、何しろ、叱るには余り小さ過ぎると思って、つい我慢をする。一昨日も昨日もそうであったが、今日もまた一日そうなのかと思うと、朝から心持が好くない。胃が悪いのでこの頃は朝飯を食わぬ掟にしてあるから、紅茶茶碗を持ったまま、書斎へ退いた。

火鉢に手を翳して、少し暖たまっていると、子供は向うの方でまだ泣いている。そのうち掌だけは煙が出るほど熱くなった。けれども、脊中から肩へ掛けては無暗に寒い。殊に足の先は冷え切って痛い位である。だから仕方なしに凝としていた。少しでも手を動かすと、手が何処か冷たい所に触れる。それが刺にでも触ったほど神経に伝える。首をぐるりと回してさえ、頸の付根が着物の襟にひやりと滑るのが堪え難い感じである。自分は寒さの圧迫を四方から受けて、十畳の書斎の真中に竦んでいた。この書斎は板の間である。椅子を用いべきところを、絨氈を敷いて、普通の畳の如くに想像して坐っている。ところが敷物が狭いので、四方とも二尺がたは、つるつるした板の間が剥き出しに光っている。凝としてこの板の間を眺めて、竦んでいると、男の子がまだ泣いている。とても仕事をする勇気が出ない。

ところへ妻がちょっと時計を拝借と這入って来て、また雪になりましたという。見ると、細かいのが何時の間にか、降り出した。風もない濁った空の途中から、静かに、急がずに、冷刻に、落ちて来る。

「おい、去年、子供の病気で、暖炉を焚いた時には炭代が幾何要ったかな」

「あの時は月末に廿八円払いました」

自分は妻の答を聞いて、座敷暖炉を断念した。座敷暖炉は裏の物置に転がっているのである。

「おい、もう少し子供を静かに出来ないかな」

妻はやむをえないというような顔をした。そうして、いった。

「お政さんが御腹が痛いって、大分苦しそうですから、林さんでも頼んで見てもらいましょうか」

お政さんが二、三日寝ている事は知っていたがそれほど悪いとは思わなかった。早く医者を呼んだら可かろうと、こっちから促すように注意すると、妻はそうしようと言え、時計を持ったまま出て行った。襖を閉てるとき、どうもこの部屋の寒い事といった。

まだ、かじかんで仕事をする気にならない。実をいうと仕事は山ほどある。自分の原稿

を一回分書かなければならない。ある未知の青年から頼まれた短篇小説を二、三篇読んで置く義務がある。ある雑誌へ、ある人の作を手紙を付けて紹介する約束がある。この二、三か月中に読むはずで読めなかった書籍は机の横に堆かく積んである。この一週間ほどは仕事をしようと思つて机に向うと人が来る。そうして、皆何か相談を持ち込んでくる。その上に胃が痛む。その点からいふと今日は幸いである。けれども、どう考えても、寒くて億劫で、火鉢から手を離す事が出来ない。

すると、玄関に車を横付けにしたものがある。下女が来て長沢さんが御出になりましたという。自分は火鉢の傍に竦だまま、上眼遣をして、這入って来る長沢を見上げながら、寒くて動けないよといった。長沢は懐中から手紙を出して、この十五日は旧の正月だから、是非都合してくれとか何とかいう手紙を読んだ。相変らず金の相談である。長沢は十二時過ぎに帰った。けれども、まだ寒くて仕様がなない。いっそ湯にでも行って、元気を付けようと思つて、手拭を提げて玄関へ出掛かると、御免下さいという吉田に出っ食わした。座敷へ上げて、色々の上話を聞いていると、吉田はほろほろ涙を流して泣き出した。その内奥の方では医者に来て何だかごたごたしている。吉田が漸く帰ると、子供がまた泣き出した。とうとう湯に行った。

湯から上ったら始めて暖ったかになった。晴々して、家へ帰って書齋に這入ると、洋燈が点いて窓掛が下りている。火鉢には新しい切炭が活けてある。自分は座布団の上にとっかりと坐った。すると、妻が奥から寒いでしようといつて蕎麦湯を持って来てくれた。お政さんの容体を聞くと、ことによると盲腸炎になるかも知れないんだそうですよという。自分は蕎麦湯を手を受けて、もし悪いようだったら、病院に入れてやるが可いと答えた。妻はそれが宜いでしようと茶の間へ引き取た。

妻が出て行ったらあとが急に静かになった。全くの雪の夜である。泣く子は幸いに寝たらしい。熱い蕎麦湯を啜りながら、あかるい洋燈の下で、継ぎ立ての切炭のばちばち鳴る音に耳を傾けていると、赤い火気が、囲われた灰の中で仄に揺れている。時々薄青い焰が炭の股から出る。自分はこの火の色に、始めて一日の暖味を覚えた。そうして次第に白くなる灰の表を五分ほど見守っていた。

下宿

始めて下宿をしたのは北の高台である。赤煉瓦の小じんまりした二階建が気に入ったの

で、割合に高い一週二磅の宿料を払って、裏の部屋を一間借り受けた。その時表を専領しているK氏は目下蘇格蘭巡遊中で暫くは帰らないのだと主婦の説明があった。

主婦というのは、眼の凹んだ、鼻のしゃくれた、顎と頬の尖った、鋭い顔の女で、ちょっと見ると、年恰好の判断が出来ないほど、女性を超越している。疳、癖み、意地、利かぬ氣、疑惑、あらゆる弱点が、穏かな眼鼻を散々に弄んだ結果、こう拗ねくれた人相になったのではあるまいかと自分は考えた。

主婦は北の國に似合わしからぬ黒い髪と黒い眸を有っていた。けれども言語は普通の英吉利人と少しも違った所がない。引き移った当日、階下から茶の案内があったので、降りて行つて見ると、家族は誰もいない。北向の小さい食堂に、自分は主婦とたった二人差向いに坐った。日の当った事のないように薄暗い部屋を見回すと、マントルピースの上に淋しい水仙が活けてあった。主婦は自分に茶だの焼麩麩を勧めながら、四方山の話をした。その時何かの拍子で、生れ故郷は英吉利ではない、仏蘭西であるという事を打ち明けた。そうして黒い眼を動かして、後の硝子壘に挿してある水仙を顧りみながら、英吉利は曇つていて、寒くて不可ないといった。花でもこの通り奇麗でないかと教えたつもりなのだろう。自分は肚の中でこの水仙の乏しく咲いた模様と、この女のひすばった頬の中を流れてい

る、色の褪めた血の滲とを比較して、遠い仏蘭西で見るべき暖かな夢を想像した。主婦の黒い髪や黒い眼の裏には、幾年の昔に消えた春の匂の空しき歴史があるのだろう。あなたは仏蘭西語を話しますかと聞いた。いいやと答えようとする舌先を遮って、一、三句続け様に、滑らかな南の方の言葉を使った。こういう骨の勝った咽喉から、どうして出るだろうと思う位美しいアクセントであった。

その夕、晚餐の時は、頭の禿げた髻の白い老人が卓に着いた。これが私の親父ですと主婦から紹介されたので始めて主人は年寄であったんだと気が附いた。この主人は妙な言葉遣をする。ちょっと聞いても決して英人ではない。なるほど親子して、海峡を渡って、倫敦へ落ち附いたものだなと合点した。すると老人が私は独逸人であると、尋ねもせぬのに向うから名乗って出た。自分は少し見当が外れたので、そうですかといったきりであった。

部屋へ帰って、書物を読んでいると、妙に下の親子が気に懸って堪らない。あの爺さんは骨張った娘と較べて何処も似た所がない。顔中は腫れ上ったように膨れている真中に、ずんぐりした肉の多い鼻が寝転んで、細い眼が二つ着いている。南亜の大統領にクルーゲルというのがあった。あれによく似ている。すっきりと心持よくこっちの眸に映る顔ではない。その上娘に対しての物のいい方が和氣を欠いている。歯が利かなくなつて、もごもご

しているくせに何となく調子の荒い所が見える。娘も阿爺に対するときには、險相な顔がいとど險相になるように見える。どうしても普通の親子ではない。——自分はこう考えて寝た。

翌日朝飯を食いに下りると、昨夕の親子の外に、また一人家族が殖えている。新しく食卓に連なった人は、血色の好い、愛嬌のある、四十恰好の男である。自分は食堂の入口でこの男の顔を見た時、始めて、生気のある人間社会に住んでいるような心持ちがした。my brother と主婦がその男を自分に紹介した。やっぱり亭主では無かったのである。しかし兄弟とはどうしても受取れない位顔立が違っていた。

その日は中食を外でして、三時過ぎに帰って、自分の部屋へ這入ると間もなく、茶を飲みに来いといって呼びにきた。今日も疊っている。薄暗い食堂の戸を開けると、主婦がたった一人燠炉の横に茶器を控えて坐っていた。石炭を燃してくれたので、幾分か陽気な感じがした。燃えついたらばかりの箆に照らされた主婦の顔を見ると、うすく火熱った上に、心持御白粉を塗っている。自分は部屋の入り口で化粧の淋しみという事を、しみじみと悟った。主婦は自分の印象を見抜いたような眼遣いをした。自分が主婦から一家の事情を聞いたのはこの時である。

主婦の母は、二十五年の昔、ある仏蘭西人に嫁いで、この娘を挙げた。幾年か連れ添った後夫は死んだ。母は娘の手を引いて、再び独逸人の許に嫁いだ。その独逸人が昨夜の老人である。今では倫敦のウエスト・エンドで仕立屋の店を出して、毎日々々そこへ通勤している。先妻の子も同じ店で働いているが、親子非常に仲が悪い。一つ家にいても、口を利いた事がない。息子は夜きつと遅く帰る。玄関で靴を脱いで足袋跣足になって、爺に知れないように廊下を通って、自分の部屋へ這入って寝てしまう。母はよほど前に失くなった。死ぬ時に自分の事をくれぐれもいい置いて死んだのだが、母の財産はみんな阿爺の手に渡って、一銭も自由にする事が出来ない。仕方がないから、こうして下宿をして小遣を拵るのである。アグニスは一――

主婦はそれより先を語らなかつた。アグニスというのは此処のうちに使われている十三、四の女の子の名である。自分はその時今朝見た息子の顔と、アグニスとの間に何処か似た所があるような気がした。恰もアグニスは焼麴麩を抱えて厨から出て来た。

「アグニス、焼麴麩を食べるかい」

アグニスは黙って、一片の焼麴麩を受けてまた厨の方へ退いた。

一カ月の後自分はこの下宿を去った。

猫の墓

早稲田へ移ってから、猫が段々瘠せて来た。一向に小供と遊ぶ気色がない。日が当ると縁側に寝ている。前足を揃えた上に、四角な顎を載せて、じっと庭の植込を眺めたまま、いつまでも動く様子が見えない。小供がいくらその傍で騒いでも、知らぬ顔をしている。小供の方でも、初めから相手にしなくなった。この猫はとても遊び仲間に来ないといわんばかりに、旧友を他人扱いにしている。小供のみではない、下女はただ三度の食を、台所の隅に置いてやるだけでその外には、殆ど構い附けなかった。しかもその食は大抵近所にいる大きな三毛猫が来て食ってしまった。猫は別に怒る様子もなかった。喧嘩をする所を見た試しもない。ただ、じっとして寝ていた。しかしその寝方に何所となく余裕がない。伸びびり楽々と身を横に、日光を領しているのと違って、動くべきせきがないために——これでは、まだ形容し足りない。懶さの度のある所まで通り越して、動かなければ淋しいが、動くとなお淋しいので、我慢して、じっと辛抱しているように見えた。その眼附は、何時でも庭の植込を見ているが、彼れは恐らく木の葉も、幹の形も意識していなかったの

だろう。青味がかかった黄色い瞳子を、ぼんやりひと所に落ち付けているのみである。彼れが家の小供から存在を認められぬように、自分でも、世の中の存在を判然と認めていなくなったらしい。

それでも時々是用があると見えて、外へ出て行く事がある。すると何時でも近所の三毛猫から追懸けられる。そうして、怖いものだから、縁側を飛び上がって、立て切つてある障子を突き破つて、囲炉裏の傍まで逃げ込んでくる。家のものが、彼れの存在に気が附くのはこの時だけである。彼れもこの時に限って、自分が生きている事実を、満足に自覚するのだろう。

これが度重なるにつれて、猫の長い尻尾の毛が段々抜けて来た。始めは所々がぼくぼく穴のように落ち込んで見えたが、後には赤肌に脱け広がって、見るも気の毒なほどにだらりと垂れていた。彼れは万事に疲れ果てた、体軀を押し曲げて、しきりに痛い局部を舐め出した。

おい猫がどうかしたようだなという、そうですね、やっぱり年を取った所為でしょうと、妻は至極冷淡である。自分もそのままにして放つて置いた。すると、しばらくしてから、今度は三度のものを時々吐くようになった。咽喉の所に大きな波を打たして、嘔とも、

しゃくりとも附かない苦しそうな音をさせる。苦しうだけれども、やむをえないから、気が附くと表へ追出す。でなければ畳の上でも、布団の上でも容赦なく汚す。来客の用意に拵えた八反の座布団は、大方彼れのために汚されてしまった。

「どうも仕様がなないな。腸胃が悪いんだろう、宝丹でも水に溶いて飲まして遣れ」

妻は何ともいわなかった。二、三日してから、宝丹を飲ましたかと聞いたら、飲ましても駄目です、口を開きませんという答をした後で、魚の骨を食べさせると吐くんですと説明するから、じゃ食わせんが好いじゃないかと、少し嶮どんに叱りながら書見をしていた。猫は吐気がなくなりさえすれば、依然として、大人しく寝ている。この頃では、じっと身を竦めるようにして、自分の身を支える縁側だけが便であるという風に、如何にも切り詰めた蹲踞まり方をする。眼附も少し変って来た。始めは近い視線に、遠くのもの映る如く、悄然たるうちに、どこか落付が有ったが、それが次第に怪しく動いて来た。けれども眼の色は段々沈んで行く。日が落ちて微かな稲妻があらわれるような気がした。けれども放って置いた。妻も気にも掛けなかったらしい。小供は無論猫のいる事さえ忘れてる。ある晩、彼は小供の寝る夜具の裾に腹遣になっていたが、やがて、自分の捕った魚を取り上げられる時に出すような唸声を挙げた。この時変だとな気が附いたのは自分だけであ

る。小供はよく寝ている。妻は針仕事に余念がなかった。しばらくすると猫がまた唸った。妻は漸く針の手を止めた。自分は、どうしたんだ、夜中に小供の頭でも噛られちゃ大変だといった。まさかと妻はまた襦袢の袖を縫い出した。猫は折々唸っていた。

明くる日は囲炉裏の縁に乗ったなり、一日唸っていた。茶を注いだり、薬缶を取ったりするのが気味が悪いようであった。が、夜になると猫の事は自分も妻もまるで忘れてしまった。猫の死んだのは実にその晩である。朝になって、下女が裏の物置に薪を出しに行った時は、もう硬くなって、古い竈の上に倒れていた。

妻はわざわざその死態を見に行った。それから今までの冷淡に引き更えて急に騒ぎ出した。出入の車夫を頼んで、四角な墓標を買って来て、何か書いて遣って下さいという。自分分は表に猫の墓と書いて、裏にこの下に稲妻起る宵あらんと認めた。車夫はこのまま、埋めても好いんですかと聞いています。まさか火葬にも出来ないかかと下女が冷かした。小供も急に猫を可愛がり出した。墓標の左右に硝子の罎を二つ活けて、萩の花を沢山挿した。茶碗に水を汲んで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替えられた。三日目の夕方に四つになる女の子が——自分はこの時晝斎の窓から見ていた——たった一人墓の前へ来て、しばらく白木の棒を見ていたが、やがて手に持った、おもちゃの杓子を卸して、猫に

供えた茶碗の水をしゃくって飲んだ。それも一度ではない。萩の花の落ちこぼれた水の盛りは、静かな夕暮の中に、幾度か愛子の小さい咽喉を潤おした。

猫の命日には、妻がきつと一切れの鮭と、鯉節を掛けた一杯の飯を墓の前に供える。今でも忘れた事がない。ただこの頃では、庭まで持って出ずに、大抵は茶の間の簞笥の上へ載せて置くようである。

御作さんは起きるが早い、まだ髪結は来ないか、髪結は来ないかと騒いでいる。髪結は昨夕儘かに頼んで置いた。外さまで御座いませんから、都合をして、是非九時までは上りますとの返事を聞いて、漸く安心して寝た位である。柱時計を見ると、もう九時には五分しかない。どうしたんだらうと、如何にも焦れたそうなので、見兼ねた下女は、ちよつと見て参りましようとして出て行つた。御作さんは及び腰になつて、障子の前に取り出した鏡台を、立ながら覗き込んで見た。そうして、わざと唇を開けて、上下とも奇麗に揃つた白い歯を残らず露わした。すると時計が柱の上でボンボンと九時を打ち出した。御作さんは、すぐ立ち上つて、間の襖を開けて、どうしたんですよ、貴方も九時過ぎですよ。起きて下さらなくっちゃ、晩くなるじゃありませんかといった。御作さんの旦那は九時を聞いて、今床の上に起き直つたところである。御作さんの顔を見るや否や、あいよとい

ながら、気軽に立ち上がった。

御作さんは、すぐ台所の方へ取つて返して、楊枝と歯磨と石鹼と手拭を一通り纏めて、さあ、早く行つていらつしやい、と旦那に渡した。帰りにちよつと鞆を刺つて来るよと、銘仙のどてらの下へ浴衣を重ねた旦那は、沓脱へ下りた。じゃ、ちよいと御待ちなさいと、御作さんはまた奥へ駆け込んだ。その間に旦那は楊枝を使い出した。御作さんは用筆筒の抽出から小さい熨斗袋を出して、中へ銀貨を入れて、持つて出た。旦那は口が利けないものだから、黙つて、袋を受取つて格子を跨いだ。御作さんは旦那の肩の後へ、手拭の余りがぶら下がっているのを、少しの間眺めていたが、やがて、また奥へ引込んで、ちよつと鏡台の前へ坐つて、再び我が姿を映して見た。それから筆筒の抽出を半分開けて、少し首を傾けた。やがて、中から何か二、三点取り出して、それを畳の上へ置いて考えた。が、折角取り出したものを、一つだけ残して、あとは丁寧にしまつてしまつた。それからまた二番目の抽出を開けた。そうしてまた考えた。御作さんは、考えたり、出したり、またはしまつたりするので約三十分ほど費やした。その間も始終心配そうに柱時計を眺めていた。漸く衣裳を揃えて、大きな鶴金木綿の風呂敷にくるんで、座敷の隅に押し遣ると、髪結が驚いたような大きな声を出して勝手口から這入つて来た。どうも遅くなつて済みません、

息を喘ませて言訳をいっている。御作さんは、本当に、御忙がしいところを御気の毒さまでしたねえと、長い煙管を出して髪結に煙草を吞ました。

梳手が来ないので、髪を結うのに大分暇が取れた。旦那は湯に入つて、髭を剃つて、やがて帰つて来た。その間に、御作さんは、髪結に今日は美しいちゃんを誘つて、旦那に有楽座へ連れて行つてもらうんだと話した。髪結はおやおや私も御件をしたいもんだなどと、大分冗談交りの御世辞を使った末、どうぞ御緩りと帰つて行つた。

旦那は躰金木綿の風呂敷を、ちよつと剝つて見て、これを着て行くのかい、これよりか、この間の方がお前には似合うよといった。でも、あれは、もう暮に、美しいちゃんの所へ着て行つたんですものと御作さんが答えた。そうか、じゃこれが好いだらう。己は彼方の綿入羽織を着て行こうか、少し寒いようだねと、旦那がまたいい出すと、御魔しなさいよ、見つともない、一つものばかり着てと、御作さんは緋の綿入羽織を出さなかつた。

やがて、御化粧が出来上つて、流行の縮緬の道行を着て、毛皮の襟巻をして、御作さんは旦那と一所に表へ出た。歩きながら旦那にぶら下がるようにして話をする。四つ角まで出ると交番の所に人が大勢立っていた。御作さんは旦那の廻套の羽根を捕まえて、伸び上がりながら、群集の中を覗き込んだ。

真中に印禰天を着た男が、立つとも坐るとも片附かずに、のらくらしている。今までも泥の中へ何度も倒れたと見えて、たださえ色の変つた禰天がびたびたに濡れて寒く光っている。巡査が御前は何だというと、呂律の回らない舌で、お、おれは人間だと威張っている。そのたんびに、みんなが、どつと笑う。御作さんも旦那の顔を見て笑つた。すると酔つ払いは承知しない。怖い眼をして、あたりを見廻しながら、な、なにが可笑しい。己が人間なのが、何処が可笑しい。こう見えたつて、といつて、だらりと首を垂れてしまふかと思つと、突然思い出したように、人間だと大きな声を出す。

ところへまた印禰天を着た脊の高い黒い顔をした男が荷車を引いて何処からか、遣つて来た。人を押し分けて巡査に何か小さな声でいっていたが、やがて、酔つ払いの方を向いて、さあ、野郎連れて行つて遣るから、この上へ乗れといった。酔払いは嬉しそうな顔をして、ありがてえといいながら荷車の上に、どさりと仰向けに寝た。明かるい空を見て、しよぼしよぼした眼を、二、三度ばちつかせたが、篋棒め、こう見えたつて人間でえといつた。うん人間だ、人間だから大人しくしているんだよと、脊の高い男は藁の縄で酔払いを荷車の上へ緊かり縛り附けた。そうして屠られた豚のように、がらがらと大通りを引いて行つた。御作さんはやっぱり廻套の羽根を捕まえたまま、注目飾りの間を、向うへ押さ

114 れて行く荷車の影を見送つた。そうして、これから美しいちゃんの所へ行つて、美しいちゃんに話す種が一つ殖えたのを喜んだ。

声

豊三郎がこの下宿へ越して来てから三日になる。始めの日は、薄暗い夕暮の中に、一生懸命に荷物の片附やら、書物の整理やらで、忙しい影の如く動いていた。それから町の湯

に入つて、帰るや否や寝てしまった。明る日は、学校から戻ると、机の前へ坐つて、しばらく書見をして見たが、急に居所が變つた所為か、全く気が乗らない。窓の外でしきりに鋸の音がする。

豊三郎は坐つたまま手を延して障子を明けた。すると、つい鼻の先で植木屋がせつせと梧桐の枝を卸している。かなり大きく延びた奴を、惜気もなく股の根から、ごしごし引いては、下へ落して行く内に、切口の白い所が目立つ位夥しくなつた。同時に空しい空が遠くから窓にあつまるように広く見え出した。豊三郎は机に頬杖を突いて、何気なく、梧桐の上を高く離れた秋晴を眺めていた。

豊三郎が眼を梧桐から空へ移した時は、急に大きな心持がした。その大きな心持が、しばらくして落附いて来るうちに、懐かしい故郷の記憶が、点を打つたように、その一角にあらわれた。点は遙かの向にあるけれども、机の上に乗せたほど明らかに見えた。

山の裾に大きな藁葺があつて、村から二町ほど上ると、路は自分の門の前で尽きている。門を這入る馬がある。鞍の横に一叢の菊を結附けて、鈴を鳴らして、白壁の中へ隠れてしまった。日は高く屋の棟を照している。後の山を、こんもり隠す松の幹が悉く光って見える。茸の時節である。豊三郎は机の上で今採つたばかりの茸の香を嗅いだ。そうして、豊、

豊という母の声を聞いた。その声が非常に遠くにある。それで手に取るように明らかに聞える。——母は五年前に死んでしまった。

豊三郎はふと驚いて、わが眼を動かした。すると先刻見た梧桐の先がまた眸に映った。延びようとする枝が、一所で伐り詰められているので、股の根は、瘤で埋まって、見悪いほど窮屈に力が入っている。豊三郎はまた急に、机の前に押し付けられたような気がした。梧桐を隔てて、垣根の外を見下すと、汚ない長屋が三、四軒ある。綿の出た蒲団が遠慮なく秋の日に照り付けられている。傍に五十余りの婆さんが立って、梧桐の先を見ていた。所々縞の消えかかった着物の上に、細帯を一筋巻いたなりで、乏しい髪を、大きな櫛のまわりに巻きつけて、茫然と、枝を透かした梧桐の頂辺を見たまま立っている。豊三郎は婆さんの顔を見た。その顔は蒼くむくんでいる。婆さんは腫れぼったい険の奥から細い眼を出して、眩しそうに豊三郎を見上げた。豊三郎は急に自分の眼を机の上に落した。

143 永日小品
三日目に豊三郎は花屋へ行って菊を買って来た。国の庭に咲くようなのをと思って、探して見たが見当らないので、やむをえず花屋のあてがったのを、そのまま三本ほど藁で括ってもらって、徳利のような花瓶へ活けた。行李の底から、帆足万里の書いた小さい軸を出して、壁へ掛けた。これは先年帰省した時、装飾用のためにわざわざ持って来たもので

144
ある。それから豊三郎は座布団の上へ坐って、しばらく軸と花を眺めていた。その時窓の前の長屋の方で、豊々という声が出た。その声が調子といい、音色といい、優しい故郷の母に少しも違わない。豊三郎は忽ち窓の障子をかざりと開けた。すると昨日見た蒼ぶくれの婆さんが、落ちかかる秋の日を額に受けて、十二、三になる鼻垂小僧を手招きしていた。がらりという音がすると同時に、婆さんは例のむくんだ眼を翻えして下から豊三郎を見上げた。